

楠露

シテ 満一

ツレ 正成

子方 正行

トモ 従者

五月

ツレ正成 「是は楠正成なり。扱も朝敵尊氏大挙して上洛すべき由聞き召され。急ぎ正成に馳せ向ひ。義貞に力を合せよとの宣旨にまかせ。唯今兵庫の津へ罷り下り候。又存ずる仔細の候間正行を旧郷へ返さばやと思ひ候。いかに誰かある。

トモ 「御前に候。

ツレ正成 「満一に正行をつれて此方へ来れと申候へ。

トモ 「畏つて候。いかに恩地殿に申候。

シテ満一 「何事にて候ぞ。

トモ 「若君の御供申し。急ぎ御本陣へ御参りあれとの御事にて候。

シテ満一 「畏つて候。いかに申上候。若君の御供申て候。

ツレ正成 「いかに正行。唯今申す事をよく／＼聞き候へ。扱も此度の出陣。正成討死すべき時こそ至りたれ。夫に就て正行は満一を伴ひ。千早に帰り命のあらん程は忠勤し。上を敬ひ下を憐み。某が志をつぎ

候へ。又満一には。正行の成長の程を頼む也。是を此世の別と思ひて。急ぎ旧郷へ帰り候へ。

子方正行

「仰謹んで承り候さり乍ら。弓矢の家に生れ。父の最期をよそに見て。誰に面を向け候べき。唯召具して給はり候へ。

正成

「ござかしき事を申す者哉。是皆朝廷の御為なれば。とくく千早に帰り候へ。

子方

「いかに君の御為なりとも。罷り帰る事はなり難う候。

正成

「やあか程迄父が申す事に従はざるやと。恩愛の子を叱りければ。

同

「正行も満一も。く。なにと云ふべき言の葉も。泣くく袖をしほりつゝ。畏つたる。けしきかなく。

正成

「此上は語つて聞せ候べし。扱も逆徒尊氏兄弟西海より大軍を率る。上洛すべき由叡聞に達し。急

ぎ正成に馳せ向ひ。義貞諸共追伐すべきとの勅詔也。正成謹んで申し上るやうは。此度逆徒罷り上る事。新手といひ大軍といひ。勞れたる官軍を以てくひとめ候はん事。中々存じも寄らず。義貞を召返され。今一度叡山へ行幸なし奉りなば。必定逆徒上洛仕候べし。其時正成は糧道を絶ち。義貞と内外より攻め候はんに於ては。恐れ乍ら御勝利疑ひある可らずと。必勝の計議を申上ぐるといへ

ども。坊門殿の支へにて。既に防戦に定る事。偏到天運の極まりなり。

クリ地
「夫日月うへに明かなれ共。雲霧光を覆ふ習ひ。今に始めぬ事なれ共。嘆きても又余りあり。

正成サシ
「良薬口に苦く。忠言耳に逆ふといふ。

同
「其故事を語給ひ。藤房の卿は世を遁れ。今正成が門出も引きは返さじ武夫の。

正成
「弥猛の心ふし清く。

同「世をいさめんと。思ふなり。

クセ「獅子の子を生みて。三日を経る時は。数千丈の巖より。是を投げて試る。其子獅子の気力あれば教へざるに宙より。跳ね返りて死せずといへり。況んや正行。十歳に余りぬ。一言耳に留めつゝ。此教戒に違はざれ。我討死と聞とても。歎きを留めいづく迄も。朝敵を平らげて。聖運の開けん事を思ふべし。

正成「たとひ逆賊日の本に。

同「羽をのし嘴を鳴すとも。命のあらん其程は。帝位を守護し私の。心いさゝか無き跡に。汚名を残す事勿れ。おひさき思ふ撫子に。かゝる涙や楠の露。時しも頃は五月雨の。ふる枝も繁る下草の。雫にしほる袂かな。

満一ロンギ

正成「花散りて。春は暮にし桜井の。名にだにありて朽ちせざる。

満一「石になるてふ楠の葉の。恨も何かあまざかる。

正成「鄙人迄も哀れしる。

満一「恩愛。

子方「親子。

満一正成子方三人「主従の。

同「別れも今更に。涙を袖に満一が。お酌に立て取敢ず。

満一「清き名を。千代に伝へて菊水の。

地「流れ久しき。湊川。(男舞)

満一ワカ「諸人の。鑑となりて。ますらをの。

地「花橘の。香ひぬる哉香ひぬる哉。

正成「斯て時刻も移るなる。

同「とくく帰れといさぎよき。仰せに従ふ主従は。

つきぬ涙をひるがへし。其名も清き。河内の国へ。帰るは孝行とまるは忠義の。畏きためしぞ。あり

がたき。

底本・・国立国会図書館デジタルコレクション『観世流謡曲錦囊 卷之四』観世流謡曲同志研究会編